秋田県立博物館研究報告第28号　83～100ページ　2003年３月

（資料紹介）秋田県下に残されている地機

宮　本　康　男*

1　はじめに

従来秋田県内で見られる地機には非常に多くの変異があるという印象があった．その変異を具体的に描きだすことを目的に，平成13年から少しずつ県下に残されている地機の確認をすすめてきた．数を尽くしたという状態にはほど遠いし，調査の空白域が多く残されてはいるが，ある程度の傾向が見えてきたので，中間的な報告を行いたい．

2　地機の利用

綿花の生産ができた北陸，関西方面では大型の地機が綿織物生産に用いられたが，本県下の地機は比較的小型で，横手綿織物業成立の極初期に用いられた可能性がある他は，産業用としてではなく，おおむね暮らしの中での織物の自給に用いられてきた．多くは麻，苧麻が織られたが，山間部ではアイコ（ミヤマイラクサ）も利用された．また，これらの草皮繊維と綿糸の交織も行われた．15歳で嫁ぎ，大館市雪沢でカラムシ布を地機で織ったと言う明治41年生まれの浪岡ソヨさんはこれらの織物を「ノノ」といい，仕立てた下着を「ノノジバ」と呼んだ．綿糸と交織した織物を含めて草皮繊維の織物を単に「ノノ」と呼んだようである．織り上がったノノは真冬に水に浸してから戸外でしみらかして（凍らせて）柔らかくした．苧引きのための金物は，さまざまに呼ばれるが，ここでは「カッカ」といった．リズミカルに苧をはだけていくときの音からそう呼んだという．このカッカは，研ぎ減って使えなくなった草刈り鎌などで自作されていたという．

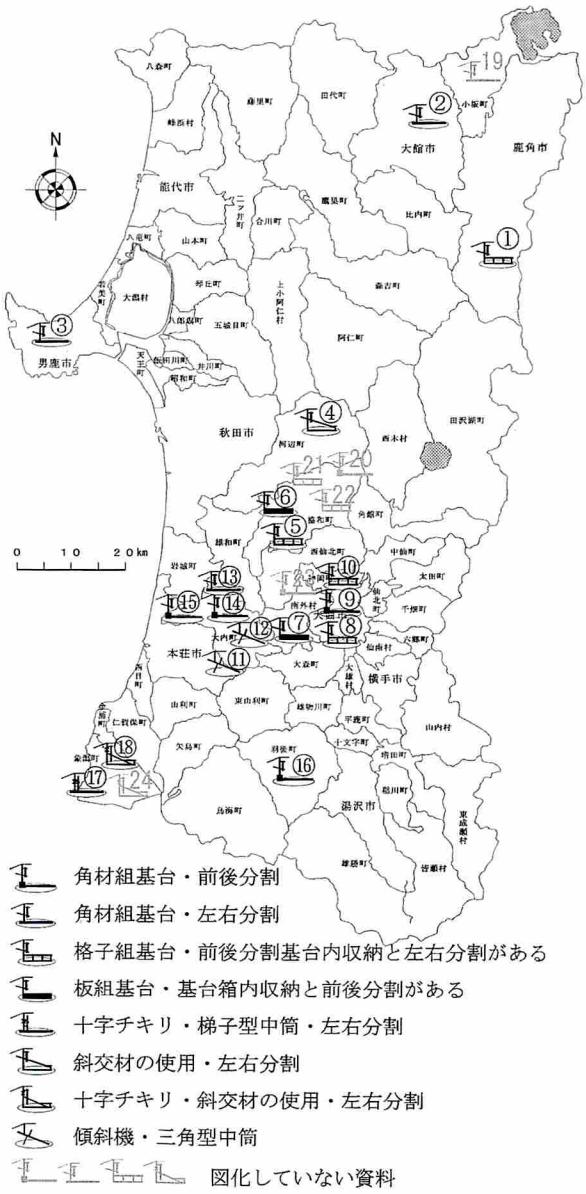
県下には地機を用いて織られたマダやフジの樹皮繊維の織物も残されているが，製織技術の実際についての情報はあまり残されていない．

地機では裂き織りも織られた．この利用はごくわずかではあるが近年まで行われていた．しかし，暮らしの必需品としての地機の使用は山間部等の辺地でも昭和初期頃までであったと見られる．

使用されなくなった地機の多くは廃棄されたがその一部は県下の公的な資料館に収蔵されている．

調査で聞いた話では，機織り機は邪魔になったので焼いたと言う例が多く，機を焼くことへの禁忌は感じられなかった．

図３－１　調査地域と調査を行った地機



*秋田県立博物館

3　調査について

これまで県内11市町村で，地元の資料館や個人が収蔵する24台の地機を調査し，内18台については寸法を計測し図化を行った．図３－１

復元組立，写真撮影，採寸図化と並行して機の経歴を調査したが，収集地・寄贈者以上の詳細な収集データはほとんど残されていない．この調査で実際に地機で布を織った人の話が聞けたのは大館市雪沢の１件のみであった．

機のそれぞれの土地での呼び名はわずかしか蒐集されていない．ノウチマネキ・ハコバタ（鹿角市花輪），シ・ハタシ（大館市雪沢），シタハタシ・ホキハタシ（横手市）等である．その他のものは「織り機」「イザリバタ」「機織り台」といった標準的な呼称が付けられている．経糸の開口具（中筒），経糸の巻き取り軸（チキリ），刀杼，布巻き具等の部品・付属品のローカルな呼び方はほとんどわからない．

機の形に組み立てられて保存されているものは一部で，多くは分解されて積み上げられている．部材が全部そろっていることはまれで，破損，部材の欠損のあるものがほとんどであった．

分解集積されている機は，高機，地機，筵機の部材が入り交じり，部材のサイズ，ほぞの仕口，変色の状態，材質等を合わせながら組み立ててみるまで，地機が何台あるのかも見当の付かないことが多かった．

4　調査した機の材質や細工についての概要

調査をした地機はそれぞれが個性的で同じものが二つと無いほど多様であった．細工の精度も様々で，熟練の大工によって作られたと見える精巧なものがある一方で，必要に迫られた人が適当な余り材で見よう見まねで作ったような素朴な作りのものも多く見られた．一度仕立てられた機は代々使い続けられたようで，体型に合わせて改造した跡が見える機もある．

機台の多くが杉材で作られていることが興味深く感じられる．現在見られるような造林杉材では材が柔らかく，強度が必要な機台に用いるには余り適当な材ではないように思える．機に用いられているのは材質の詰んだ天然杉で，造林杉よりはしっかりしているが，それでも杉材の機はゆるみが出てぐらぐらになっているものが多い．それを楔で締めながら使ってきたようである．たくさんあって打ち割りにより容易に製材でき，加工もしやすいことが杉材利用の理由であろう．

地機の構造材には杉に次いで桂が用いられている．材質が詰んでいる割に細工がしやすく，素直で大きい材が得やすいためであろう．

イタヤ，サクラ等は堅いので細工に苦労すること，性の良い大型材が得にくいこと，乾燥による暴れが大きいことなどから，地機の構造材としては使いにくい．

摩耗しやすい中筒を通す板や，特に強度が必要な招木の部分には，桂や栗，イタヤ等の材も用いられた．特殊な事例としては中筒の棒にサピタの枝が用いられている例（大館市雪沢）がある．刀杼にはナシ，ヤマザクラの仲間，イタヤカエデ等の緻密でささくれない材が用いられている．

5　本県下の地機の種類と特徴

地機には平置きのものと，傾斜しているものがある．概略前者が東日本，後者が西日本で使用される地機とされている．

その通りで，本県下の地機は多様だが，ほとんどが平置き型の機である．これで傾斜機が全くなければ図式通りで，話はずいぶんすっきりするのだが，実際は傾斜機が何台か見つかっているし，隣の岩手県でも傾斜機を一例見ている．

以下本県の地機をいくつかの観点から見ていきたい．

１）平置き型の機と傾斜機

①平置き型の機

県下の地機は大部分が平置き型の機であるが，以下に示すようにＡ．Ｂ．Ｃ．の三つのタイプに分けてみることができる．

Ａ．基台が単純な一重の角柱のフレームになっていて，そのままでは座板が極めて床に近いタイプ．

図５－１－１－Ａ

Ｂ．基台が格子に組まれて座板が低い腰かけ状になっているタイプ．

図５－１－１－Ｂ

C．基台が板で箱形に組まれていて，座板が低い腰かけ状になっているタイプ．図４－１－１－C

②平置き型ではあるが，機台に斜交部材が用いられているもの．図５－１－２

これには象潟町の２例と河辺町の１例がある．

象潟のこの２例は同じ型の機で，基台の材とロクロ支柱を筋交い材で固定した構造を持つ機台である．材質は桂のような広葉樹材である．

河辺町の例は基台とロクロ支柱，座板を支える支柱に斜交材を加えた台形の構造を持つ機台である．材質は杉である．この３例とも座板が高くなっている分，機台も高くなっている．

③傾斜型の地機　図５－１－３

傾斜させて設置するタイプは大内町の２例である．大内町の２例の内１例は傾斜させるための足が付いており，はっきり傾斜機であることがわかる．もう一例は，傾斜させるための足が欠損しているが，足が取り付けられていたほぞ穴が残っていること，座板の傾き等からもう一例と同様の傾斜機であったことが明らかに見て取れる．機台の長さは136.5cmと147.7cmで，北陸・関西方面の傾斜機に比べると小振りである．材質は足の残っている方が桂のような広葉樹材，足が欠損している方が杉材である．足が欠損している方の機には招木，ロクロ，足引き棒が残っている．この足引き棒は，イタヤの様な堅い木の枝でできている．後の項でも触れるが，両者とも経糸の開口具（中筒）を取り付ける仕掛けがない．県下では一般には見られない三角型の中筒が紐でロクロ支柱に繋がれていたと考えられるが，そのものは残っていない．また県下の一般の機には無い経糸の押さえ棒を取り付ける支柱がある．チキリはかんざし型のチキリが用いられたと見られるが，双方とも残っていない．岩手県立農業ふれあい公園農業科学博物館に収蔵されている傾斜型の地機も同じくらいの大きさで傾斜も似通っているが，こちらは二本棒型の中筒が取り付けられている．大内町のこの二例の地機は本調査の中では特に異質感の強い機である．

大館市雪沢の機も機台後部に７cm程度の足がついてやや傾斜しているが，こちらは基本的に平置き型の機である．

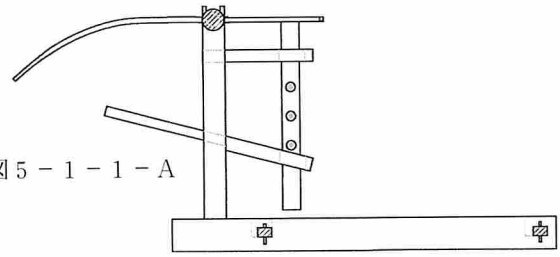


図５－１－１－A

詳細は付図－３（男鹿市）参照

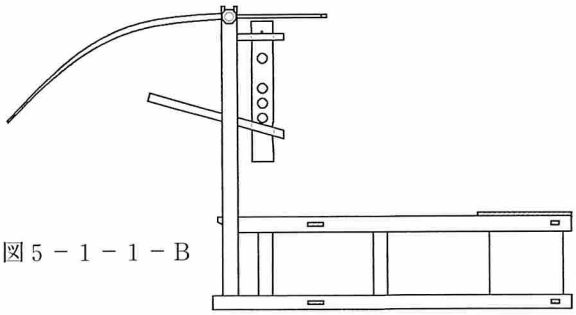


図５－１－１－B

詳細は付図－５（協和町）参照

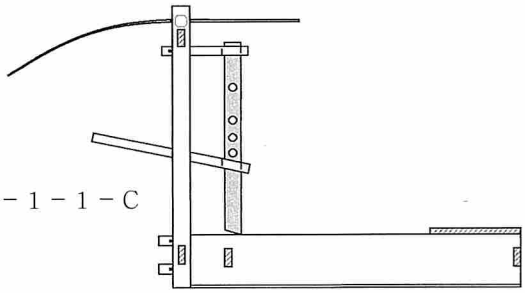


図５－１－１－C

詳細は付図－７（南外村）参照

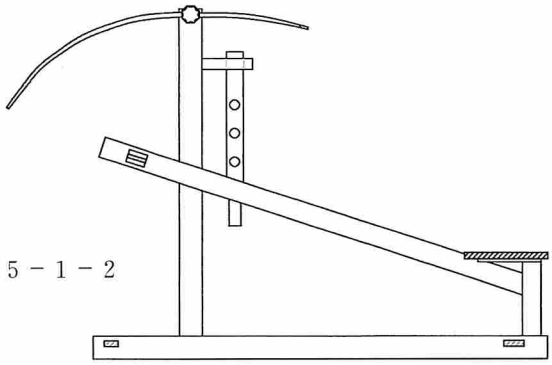


図５－１－２

詳細は付図－４（河辺郡）参照

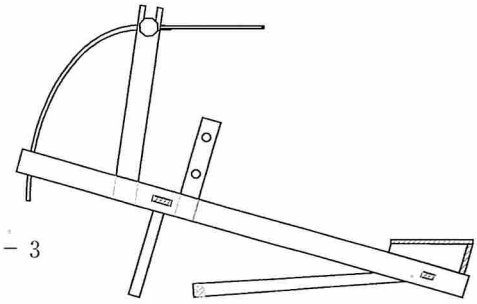


図５－１－３

詳細は付図－12（大内町）参照

2）経糸の開口具に見られる違い

地機では掛け糸などと呼ばれる片綜絖で上下の経糸を入れ替えて織るので，予め経糸を上下に分けて開口させておくための開口具が不可欠である．この開口具は一般に中筒と呼ばれているが本県内でのローカルな呼称はわからない．岩手県の例では「ツヅ」と呼ばれている例がある．

機台に取り付けられた中筒は必ず上下に遊ぶようになっている．腰を前に出して経糸の張りを緩めてから，足で綱を引いて招木をあげ，開口した経糸の上下を入れ替えると，下側の経糸が持ちあげられる力で中筒が上にあがる．これにより上の経糸と下の経糸の経路長のバランスが保たれて，経糸は無理なく開口する．中筒が上下に遊ばないと経糸の逆開口がうまく出来ない．

中筒にはいくつかのタイプがある．

①中筒が機台に組み込まれていないタイプ．

原始機では中筒は隙間を空けるために経糸の間に挿入してあるだけである．

地機でも素朴な構造のものでは中筒は経糸の間に挿入してあるだけであるが，はずれないように機台の支柱に紐でつなぐ等の工夫がされている．このタイプの中筒は三本の棒を平行に三角柱に組み合わせた形態のものである．図５－２－１

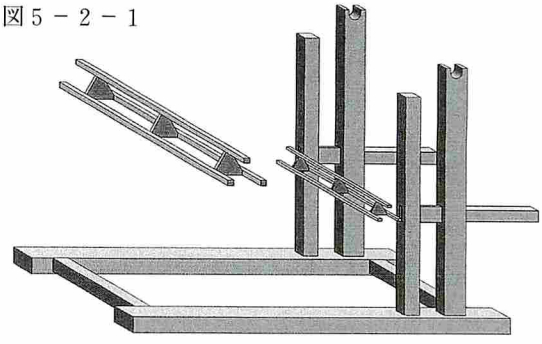
機台の違いのところでも述べたが，大内町の傾斜機は中筒を取り付ける仕掛けが無い．構造的に見て，機台から遊離した形で三角型の中筒が用いられたものと考えられる．サイズや傾斜は異なるが同様な形式の機が北陸，関西方面に見られる．

②二本の丸棒を用いる様式のもの

前述の中筒は機台から遊離しているが，少し複雑になった機台では，中筒の仕掛けを機台に組み込んだ構造となっている．これには中筒を遊ばせる方法から大きく見て二つの方式がある．その内のひとつがこの二本の丸棒を用いる様式のものである．本県下の地機の中筒はほとんどこれである．

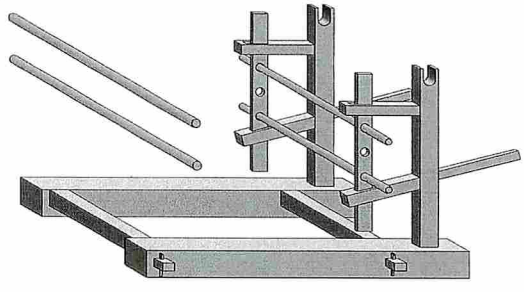
棒は丸い穴が３ないし２個あけられた幅の狭い薄い板二枚に通されて間隔を保つようになっている．そしてこの丸棒が通されている板が機台の柱から出された左右２本ずつの腕木にあけられたスリットに通されていて，一定の範囲内で上下に遊ぶようになっている．図５－２－２

図５－２－１



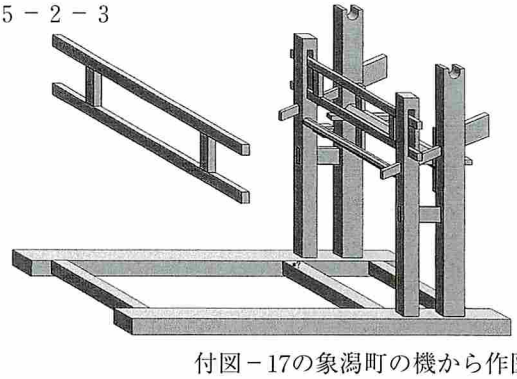
当館蔵の越後六日市の地機を参考に作図

図５－２－２



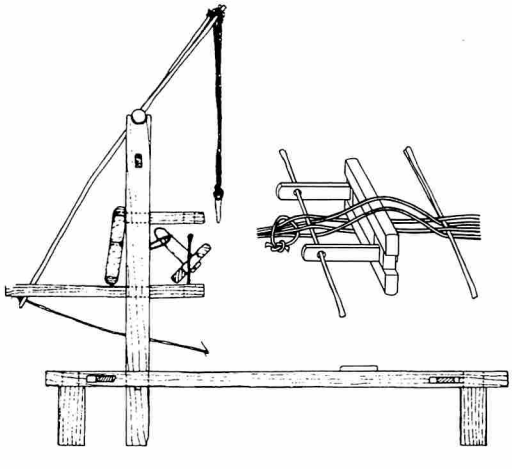
付図－３の男鹿市の機から作図

図５－２－３



付図－17の象潟町の機から作図

図５－２－４（参考）



③梯子型の中筒がスリットの中で上下するタイプ

②に対比するもう一つの方式は，基台に中筒が上下に遊ぶようなスリットを設けた支柱を立て，そこに中筒を通して使用するタイプのものである．このスリットに通して用いる中筒の最も簡単なものは一枚板で，経糸を開口させる巾の板を通して用いる．少し複雑なものでは梯子状になった中筒も用いられる．一枚板で用は足りるが，経糸に負担がかからないように軽くし，なめらかに上下させるには梯子型の方がいいように見える．

本県下で見られる梯子型の中筒は象潟町小砂川の一例のみである．図５－２－３

この小砂川の個人蔵の地機資料については経緯がはっきりしている．この家は戊辰戦争の戦乱を逃れて庄内から小砂川に移住した家で，庄内地方の文化的要素を継承している．この機は明治２年に地元の腕の良い大工に注文して作らせたものであるが，様式については家人が指示したのであろう．しかし，山形県の日本海側で見る地機（致道博物館収蔵資料・温海しな織りの機）は②の「二本棒」タイプの中筒であり，この③のタイプではない．おそらく庄内地方のどこかにこのタイプの機を使うところがあるのであろうが，まだ特定できていない．

④首振り式に上下する中筒（参考）

名久井芳枝氏によって記録紹介されている岩手県久慈市の外舘ヨスさんのハタシには，秋田県内ではこれまで見たことがないタイプの中筒が付属しているので参考として図を転載させていただいた．（名久井文明・名久井芳枝著2001『山と生きる』一芦舎より転載．作図：名久井芳枝．機所蔵者：外舘ヨス／岩手県久慈市）図５－２－４

これは「つづ」と呼ばれ，綾棒と中筒がひとつになっていて，綾棒を支点に中筒が首を上下に振って動く仕掛けになっている．

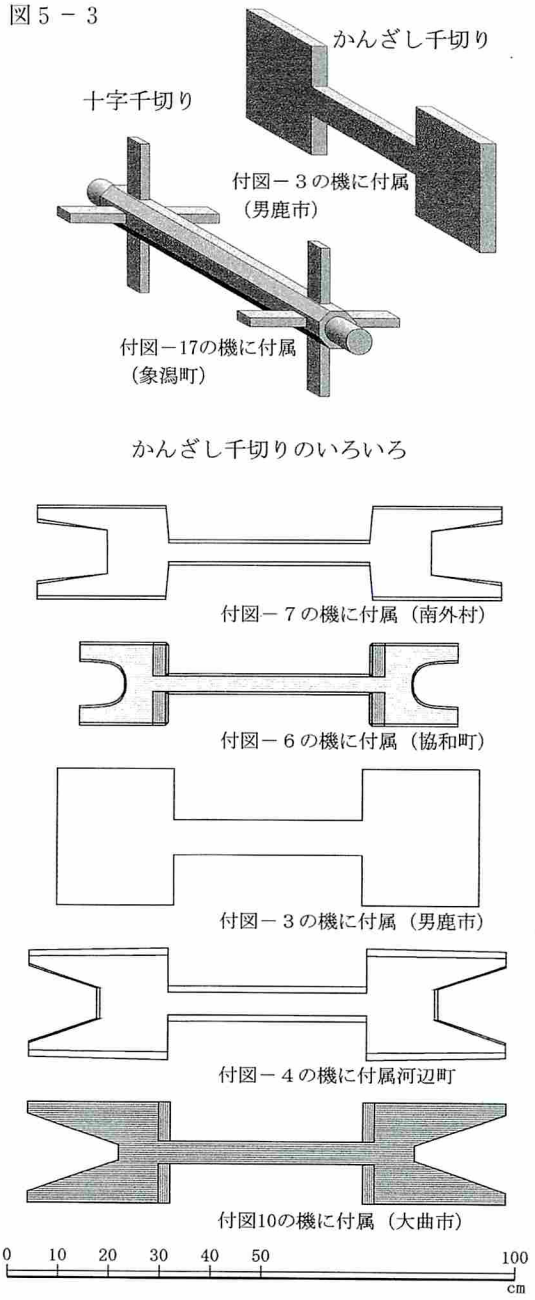
動きは①の三角型の中筒と同じような動きになると想像されるが，開口幅は三角型の方がかなり小さい．この他岩手県にはＬ字型で一続きになった樹木の幹と枝を二つに断ち割って機台とした一木造りの地機や，本県大内町の機とよく似ているが，中筒が異なる傾斜機が岩手県立農業ふれあい公園農業科学博物館にあって興味深い．

３）チキリに見られる違い　図５－３

チキリは巻き取った経糸を織り進むにつれて繰り出していく軸であるが，県内の地機に用いられるチキリには大きく見て，かんざしタイプと十字タイプのものがある．かんざしタイプのチキリは軸巾以外は千差万別である．

十字チキリは機台に回転を止めるための仕掛けと解除機構が必要となる．かんざしチキリは経糸を引く力でそのままで止まっている．チキリの左右の張り出しを棒で突いて倒してから経糸を手前に引くと，チキリは半回転して経糸を繰り出しながら起きてきて支柱に阻まれて自動的に止まる．

図５－３



4）押さえ棒に見られる違い

①機台に紐で繋がれるタイプの押さえ棒

押さえ棒は経糸を逆開口させるときに，上の経糸が下の経糸について上がらないように押さえるための棒である．原始機の織りでは押さえ棒が無く，下の経糸を引き上げる度に懸け糸の後方を横糸を打ち込む篦で押さえて逆開口させている．この篦が押さえ棒，経糸の開口具，緯打ち具をかねているが，道具立てが少ないだけ織りに手間がかかる．

押さえ棒は機台と紐でつながれていて一定以上は上に上がらないようになっている．只経糸に棒がのせてあるだけだが，これがないとうまく逆開口しない．大内町の２台の傾斜機以外は全てこのタイプの押さえ棒であった．図５－４－１

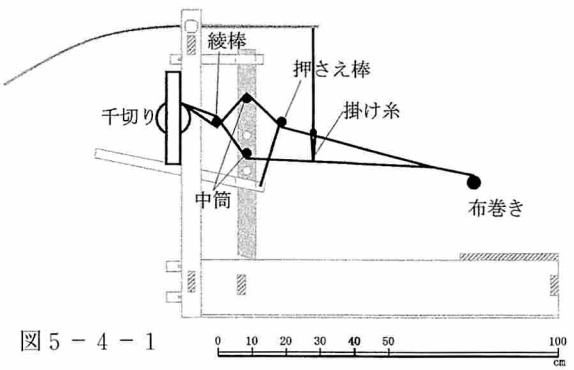


図５－４－１

②機台に組み込まれている押さえ棒

招木のロクロをのせる支柱とは別に機台に立てられたもう一組の支柱の穴に押さえ棒を通して使用するようになっていると見られる機がある．

大内町の２台の傾斜機にこの穴のあいた支柱が見られる．図５－４－２

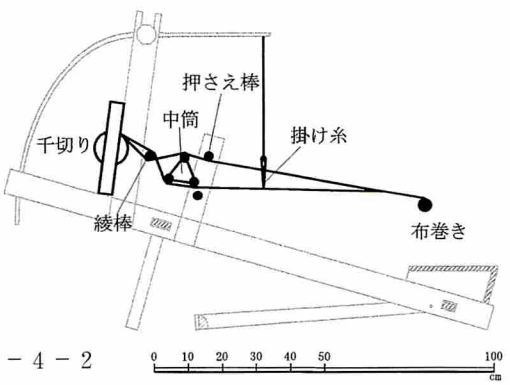


図５－４－２

5）分解収納方法から見た機のタイプ

これまで述べてきたように本県下の地機の大部分は平置き型で「二本棒」タイプの中筒と，かんざしタイプのチキリをもつ機であるが，機台の形ではなく，組立の構造に大きな理念の違いが見られる．この違いは，分解収納の仕方の違いとして反映され，大きく三つの傾向に分かれる．

①大きく，前後のブロックに分かれるタイプの機

一本の横方向の太い角材に（４～５寸角）招木のロクロ支柱二本が立ち，この太い角材に経方向の角材二本と緯方向の角材二本で組んだフレームを差し込んで構成されるタイプの機台．→大きく，太い角材に支柱二本が立つ部分とフレームの部分に分かれる．（前後に分かれる）

図５－５－１

②大きく，左右のブロックに分かれるタイプの機

経方向の角材の端に，招木のロクロ支柱を立てたもの二つを，緯方向の角材２～３本でつないで機台を構成するもの．→左右の同型の平たい部材二つに分かれる．

図５－５－２

③箱スペースに分解収納するタイプの機

箱状あるいは格子組の箱状構造の基台に招木のロクロ支柱二本を取り付けるタイプの機台．基台の箱状スペースの中にロクロ支柱，招木，ロクロ，中筒」他を分解収納．格子組の基台のものには左右に分かれるタイプのものもあるが，箱タイプのものはフレームに底板が付いたり，座板が釘付けされたりしていて左右に分解することを前提としない構造になっている．

図５－５－３

6）調査した個々の機について

調査を行った個々の機については，写真と図面にデータを付したものを記録として収録した．

付図－１～付図－18

写真のみのものは付図－19としてまとめて掲載した．（図２－１の19～24の機）

数値データについては，測定部位によりかなり変化があるので，相対的につじつまの合う平均的な値をとった．原図を10分の１で作成し，縮小表示した．

図５－５－１　大きく前後のブロックに分かれるタイプの機　大曲市（資料詳細　付図－９）
※画面上で一部復元修正

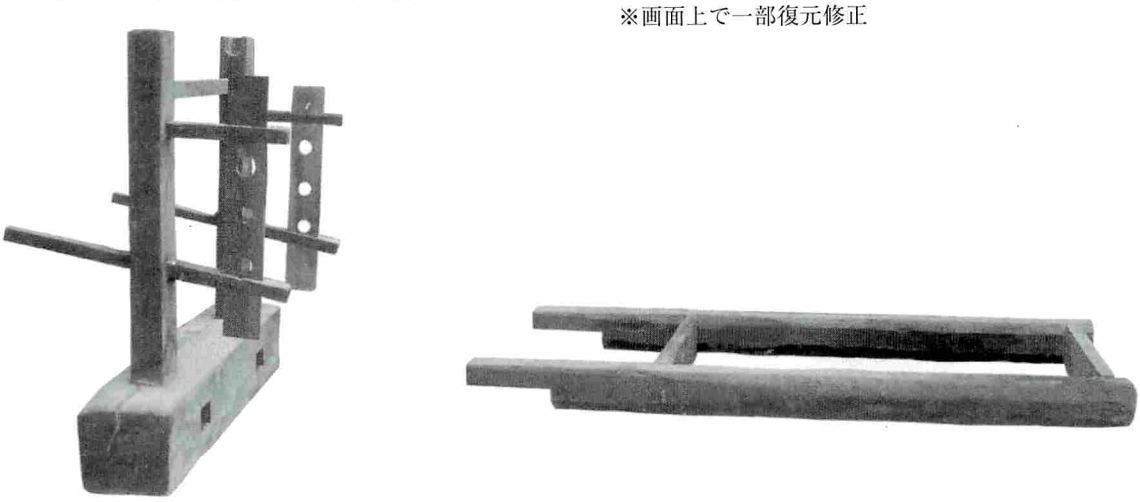


図５－５－２　大きく左右のブロックに分かれるタイプの機　男鹿市（資料詳細　付図－３）

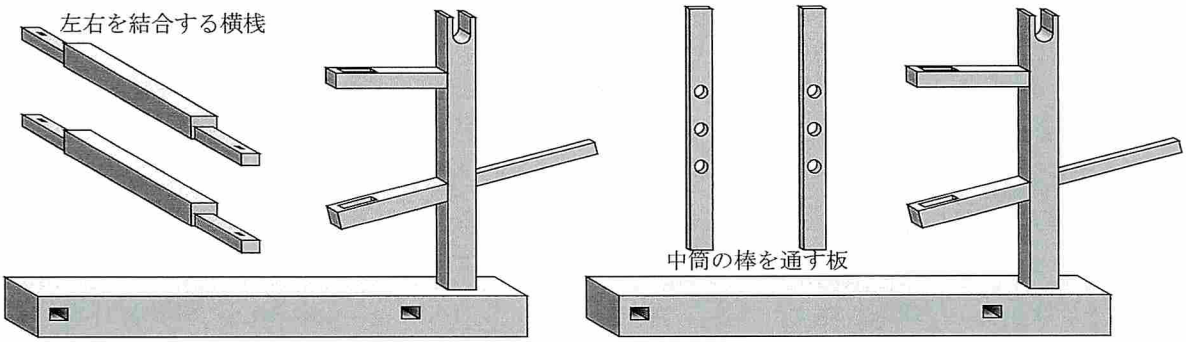
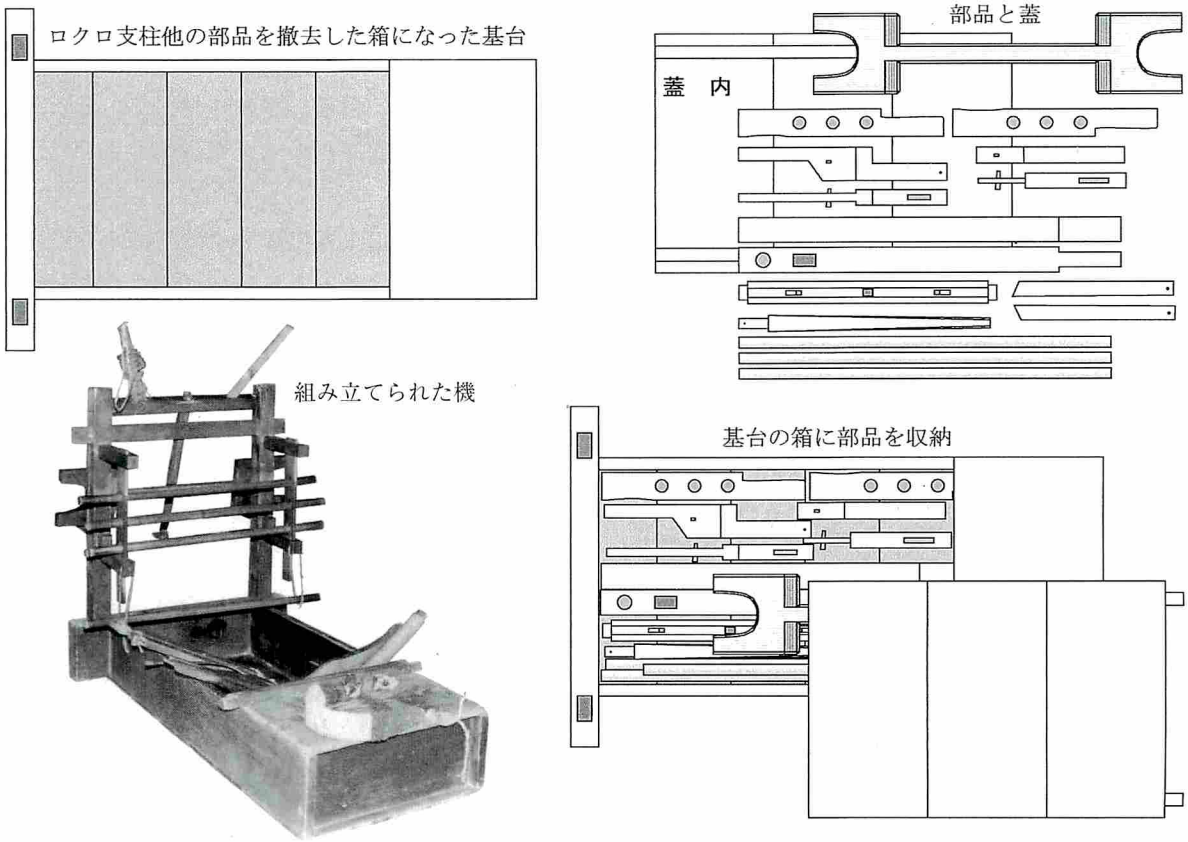


図５－５－３　箱スペースに分解収納するタイプの機　協和町（資料詳細　付図－６）



6 終わりに

これまでの調査で，成果があったとすれば，同じ地機として見てきた県下の地機の顔つきの違いが少し見分けられるようになったことであろう．機台の構造や，チキリ，中筒の違いで，いくつかの異なるタイプの機のグループに分けることができそうである．しかし，調査が十分進んでいないので，地域による機の差違についての考察はまだできる状態ではない．ただ，大内町の傾斜機２台と象潟町小砂川の１台は県下の地機の中にあって特異なものであることを再度指摘しておきたい．小砂川の機については製作された経緯がある程度明らかであるが，大内町の傾斜機については全くわからない．大ざっぱな言い方で申し訳ないが，この大内町にある２台の傾斜機は北陸・関西方面の傾斜機に比べるとかなり小振りにできてはいるものの，やはり西日本の紡織文化に縁のある機だと感じている．大内町と境界を接してはいないが近隣の八島町は，四国にルーツのある生駒氏が領したところである．八島町近辺であれば西日本の紡織文化が移植された可能性は考えられる．しかし八島町の地機については調査すべき対象をまだ見つけられないでいる．今後，四国高松の地機についても調査をする必要が出て来るであろう．

本県の地機の大部分を占める平置き型の地機については細かく分ければきりがなく，一台一台が別という状態になってしまうが，機をどのように作るかという基本的な考え方のようなもので類別すると，特徴的なものを三つあげることができる．

ａ）主要部分が枕木のような太い角材一本に作りつけられている前部と，梯子状の後部に分かれるタイプのもの．

ｂ）台にロクロ支柱をＬ字状に組み付けた同形の部材二つを，何本かの横桟で繋ぐタイプのもの．

ｃ）箱のようになった基台にロクロ支柱を立てるタイプのもの．

組み立て方が違えば，当然の事ながら機を分解して収納するやり方も異なってくる．自給自足の生産では年中機が織られるわけではないので，使わないときの機はじゃまになる．簡単に分解収納が出来てあまり大きくない機が喜ばれたのかもしれない．

機の類別の別の観点として，製織時に延ばしておく経糸の長さ（チキリあるいは中筒から布巻きまでの長さ）と延べた経糸の傾斜の違いが考えられる．これは糸の種類や織り手の使い勝手が反映されるものであろう．この観点で今回調査対象とした機を比較してみた．想定される経糸のおおよその傾斜の比較は，経糸の傾斜そのものではないが，座板から中筒までの高さを中筒から機後端までの長さで割った値で行った．県内の地機は，見かけ上経糸の傾斜が大きくなりそうな傾斜機でも，経糸の傾斜を想定してみると，似たり寄ったりのものであった．大きく異なっていたのは象潟町小砂川の機１台のみであった．この機は腰掛けを別に準備しない限り，他の県内の機より経糸の傾斜が大きくなる．

傾斜機と平置きの機の違いは地域的な大きな隔たりを感じさせるが，ａ），ｂ），ｃ）であげた違いは，平置きの地機が用いられる地域内でのもっと小さな変異であろう．

異なるタイプの地機が同時代に幾種類も共存していることから，この違いは秋田県内で少しずつ変化してできたものではなく，他の一定の地域内で変化したものが幾度か時代を隔てて移入された，あるいは全く異なる地域の機がもたらされたと考えている．大和朝廷の出羽への進出や後の時代の大名たちの領地の移動に伴って，それまでとは異なった紡織文化がもたらされたことは十分に考えられる．

佐竹氏の秋田入りに伴い常陸方面から秋田に入った人々によっても，新しい紡織文化が持ち込まれたであろう．横手の最上家の伝承では，横手木綿は，佐竹氏に伴い秋田に入った人々の中に，以前暮らしていた土地で覚えた織物の技を暮らしの足しにしようとする人々がいたことに始まるといわれている．最上家はこれらを援助することから始め，横手の綿業を推進していったという．最上家では綿織物の生産向上のため越後から職人を招くとともに「大機具」を導入したと言われる．また，明治期に最上家外の人によって記されたと見られる横手木綿史では，初期に用いられた機は「ホキハタシ」「シタハタシ」「イザリハタシ」と呼ばれる機であったと伝えている．ホキハタシ・

シタハタシ・イザリハタシは地機であり，大機具はおそらく高機であろう．横手市周辺の町々には同様式の小型の高機がいくつも残されており，これが大機具に当たるのではないかと見ている．福井県で「大機」と呼ばれる機があるが，これは大きな傾斜型の地機であり，秋田県内ではこれに類する機は見つかっていない．

どのタイプの機が，どの時代に，どの地域からもたらされて，どのように用いられたか，今のところ語ることができる内容はほとんど無い．

古代にこの土地に進出してきた人々によってもたらされた紡織技術はどのようなものだったのであろうか．また，当時のエミシと呼ばれていた人々の紡織技術はどのようなものであったのか．既に地機があったのか，原始機であったのか．

本県下の地機の違いの識別については本稿である程度明らかにできたと考えるが，違いが存在する背景については課題のみがある状態で，問題提起で報告を終えることを甚だ心苦しく感じている．

7　主な参考文献

秋田県1962『秋田県史』民俗工芸編秋田県

秋田県教育庁社会教育課1966『秋田の民俗』秋田県教育委員会

京都府立丹後郷土資料館1985『丹後の紡織Ⅰ』京都府教育委員会

柴田知彰2001「横手木綿と最上家に関する諸資料の再検討」『秋田近代史研究』43秋田近代史研究会

寺本都子1998「河内地方の復元下機による機織りの実践的研究」『八尾市歴史民俗資料館研究紀要』９号八尾市教育委員会

十日町市博物館1987『図録妻有の女衆と縮織り』十日町市博物館友の会

名久井文明・名久井芳枝2001『山と生きる』一芦舎

福井県立博物館1996『福井県の手織機と紡織用具』福井県立博物館

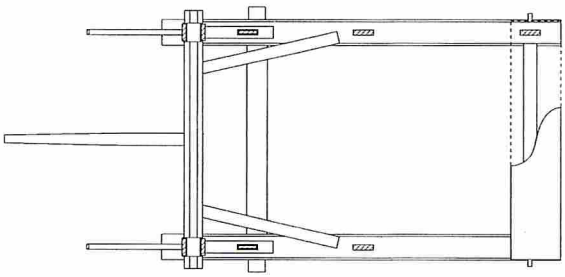
八尾市立歴史民俗資料館2001『河内の手織機』八尾市教育委員会

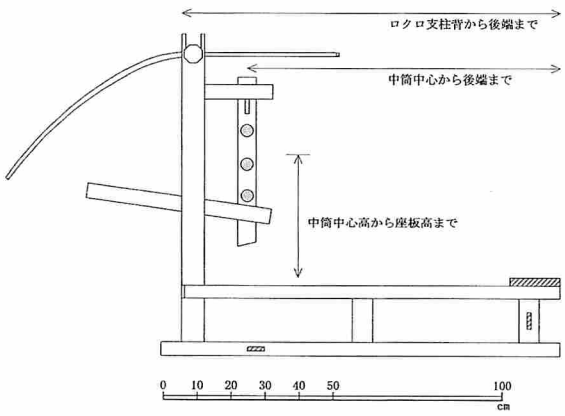
山田和夫1998「河内の下機の復元製作と機織りの実践的研究」『八尾市歴史民俗資料館研究紀要』９号八尾市教育委員会

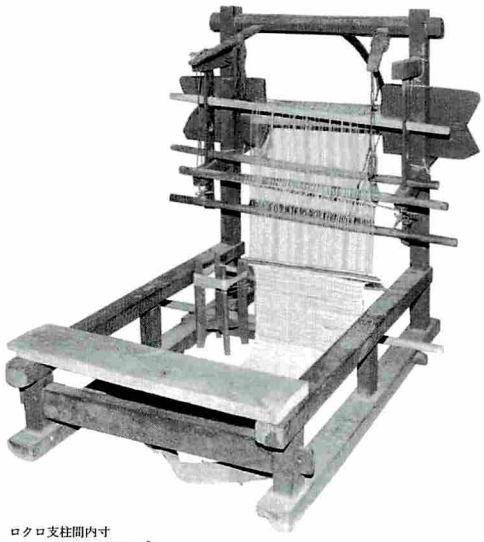
横手郷土史編纂委員会1933『横手郷土史』東洋書院

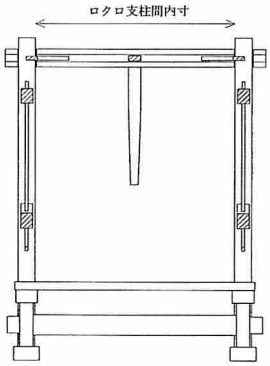
横手市史編纂委員会1981『横手市史』横手市

付図－１





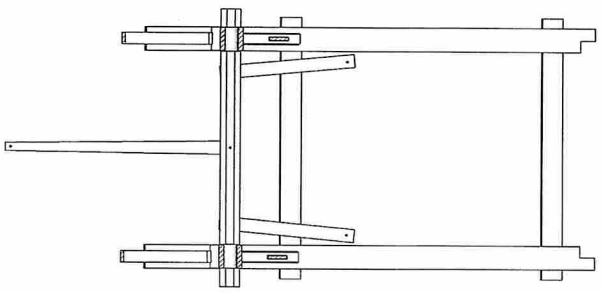


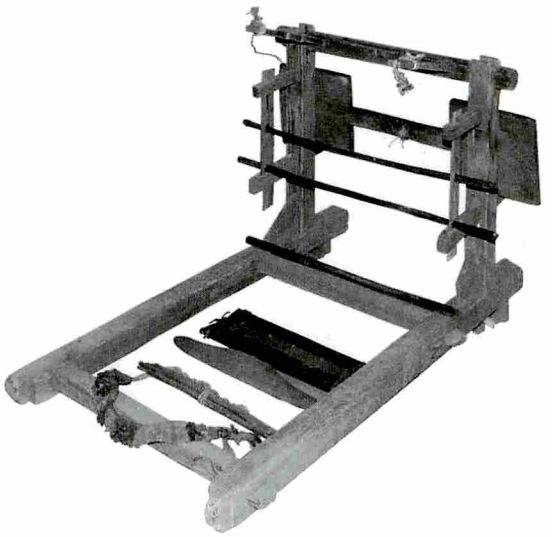


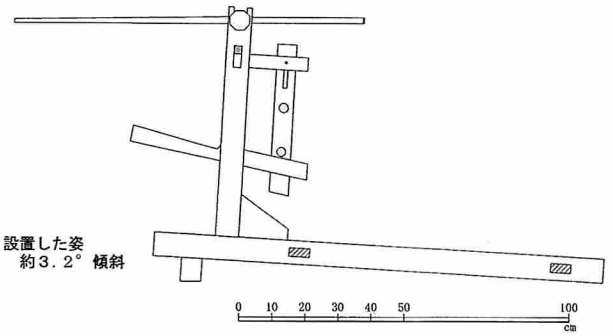
所在地　鹿角市花輪
　　鹿角市立花輪図書館
呼　称　ノウチマネキ・ハコバタ
収蔵者　鹿角市教育委員会
Ｌ：140.0（112.0）（92.7）
Ｈ：95.7（36.8）
Ｗ：71.2（58.6）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は矢羽状に切り欠き）基部は角材格子組．座板やや高く，腰掛ける姿勢．大きく左右に分解できる．材は広葉樹．ハコバタと言う呼称の理由不明（ハコバタと呼ぶ可能性のある機は別在）．

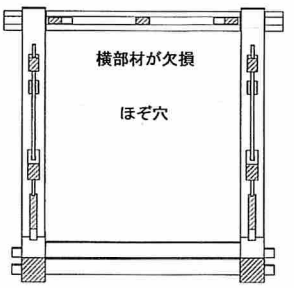
Ｌ：機台全長（ロクロ支柱背から後端まで）（中筒中心から後端まで）
Ｈ：機台全高（中筒中心高から座板高まで）
Ｗ：機台全巾／ほぞ，ロクロは含まない（ロクロ支柱間内寸）　単位：ｃｍ

付図－２



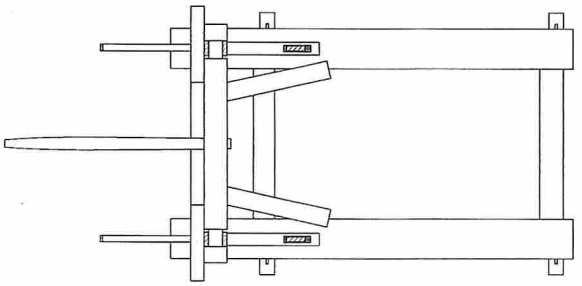


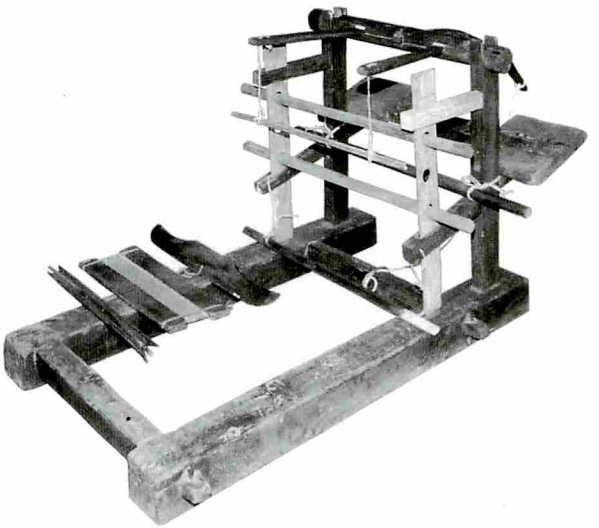


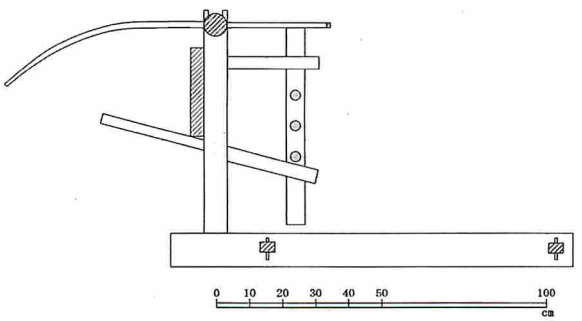


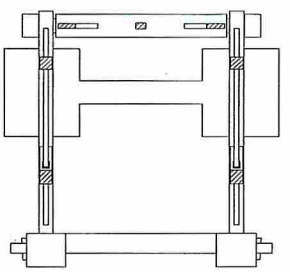
所在地　大館市雪沢
呼　称　ハタシ或いはシ
収蔵者　浪岡良一
Ｌ：145.6（118.2）（99.7）
Ｈ：82.9（41.4）
Ｗ：73.1（58.9）
　わずかに傾斜．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は切り欠き無しの四角形）．基部は角材組．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく左右に分解できる．中筒の丸棒はサピタの枝．その他の構造材はスギ．明治４１年生まれの浪岡良一氏母ソヨさんが昭和初期まで使用．

付図－３



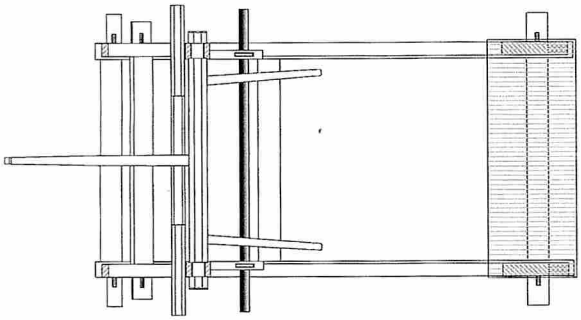


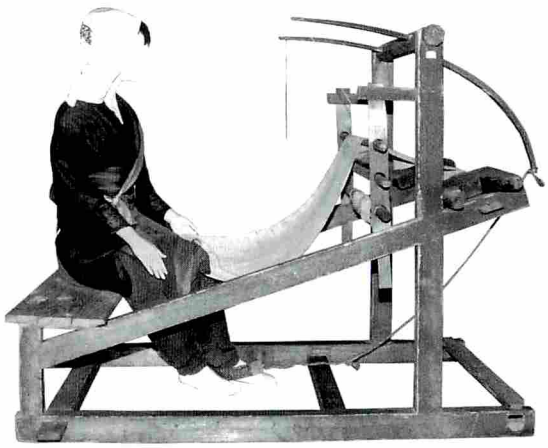


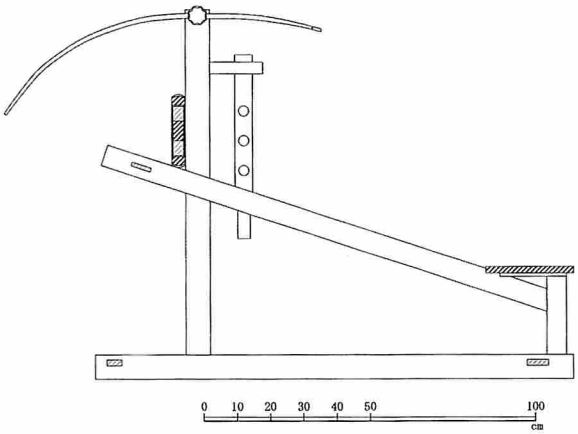


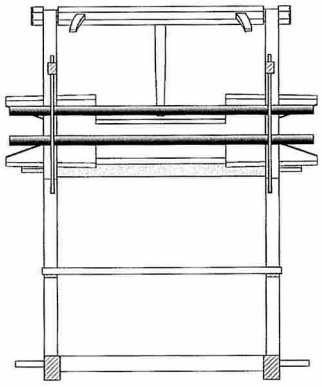
所在地　男鹿市
呼　称　不明
収蔵者　男鹿市教育委員会
Ｌ：143.3（111.7）（84.1）
Ｈ：78.0（33.5）
Ｗ：69.5（53.3）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は切り欠き無しの四角形）．基部は角材組．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく左右に分解できる．用材は杉．ロクロも芯持ちのスギ丸太で大きくひび割れる．部材の寸法がまちまちで、素朴な造り．同市船川港より収集．

付図－4



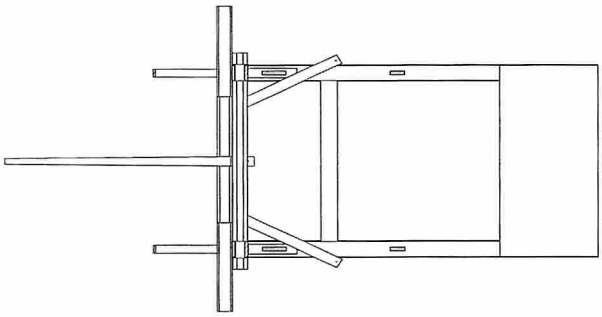


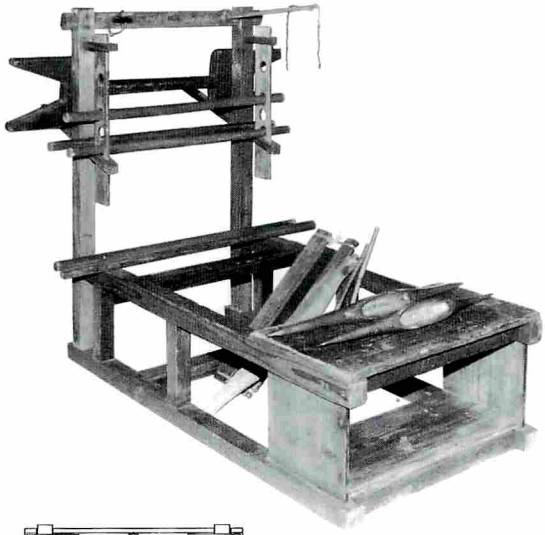


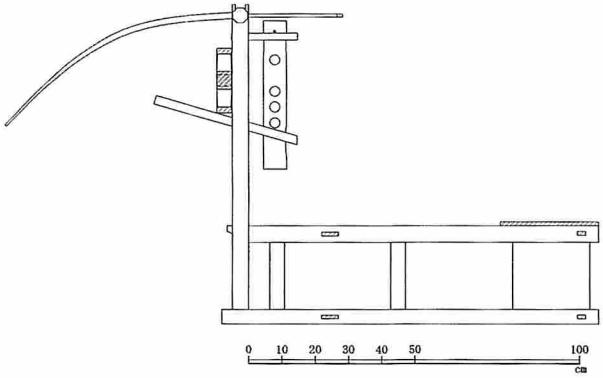


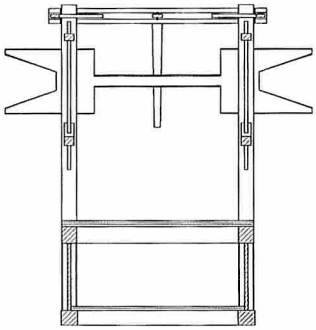
所在地　河辺郡河辺町三内字尼沢
　　河辺町農林漁業資料館
呼　称　不明（機織台）
収蔵者　河辺町商工観光課
L：144.6（117.0）（99.5）
H：111.6（40.9）
W：70.8(62.8)
　背の高い平置き機．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は矢羽状に切り欠き）．基部は斜交材が用いられた台形の構造．座板高く，腰を掛ける姿勢．大きく左右に分解できる．用材は杉．同町岩見字台の個人から寄贈された．

付図－5



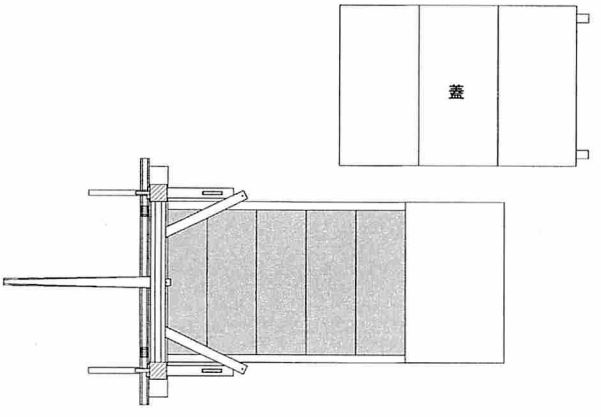


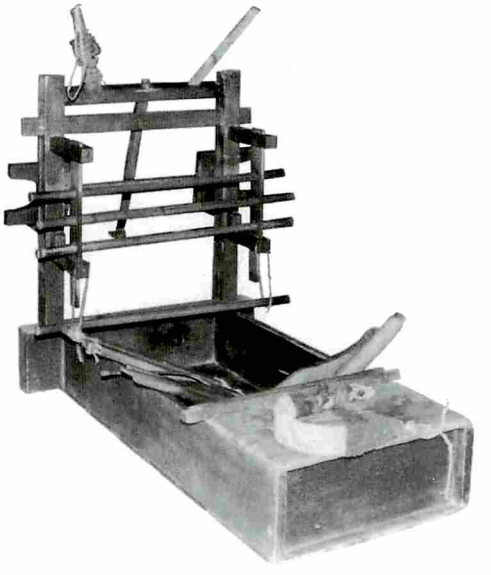


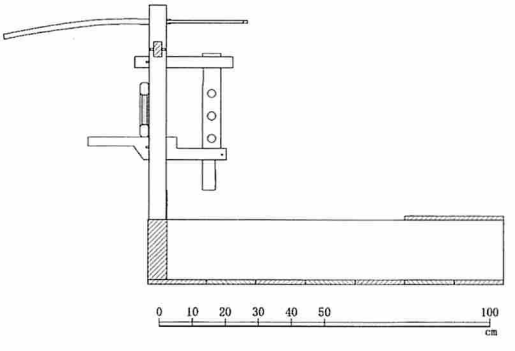


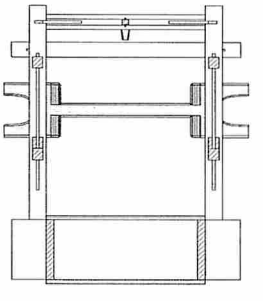
所在地　仙北郡協和町荒川
　　協和町自然資源等活用型
　　交流促進施設　大盛館
呼　称　特になし
収蔵者　協和町教育委員会
L：134.4（110.8）（98.0）
H：97.1（42.0）
W：57.7（48.7）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は矢羽状に切り欠き）．基部は角材格子組．座板やや高く，腰かける姿勢．座板は釘付け．分解したロクロ支柱等を基台内に収納．用材は杉．明治廿四年旧五月吉日の紀年銘在り．

付図－6



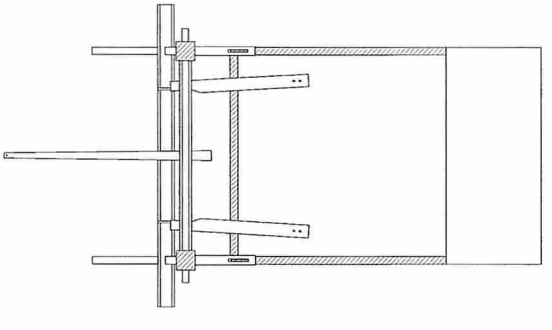


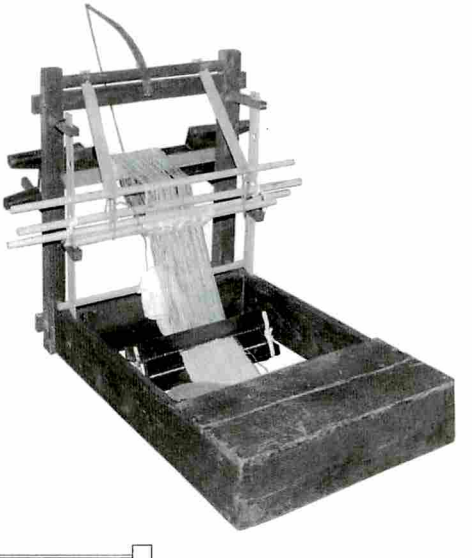


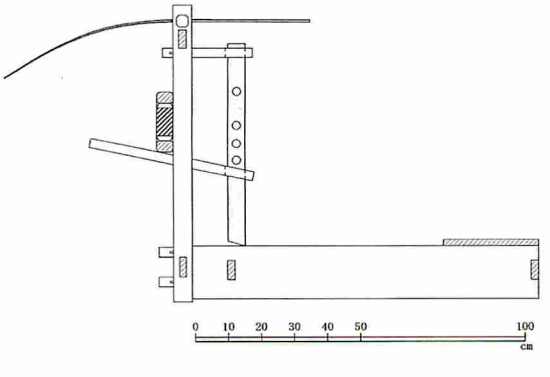


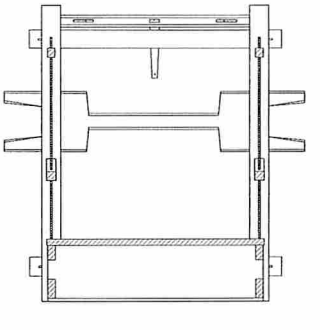
所在地　仙北郡協和町荒川
　　協和町自然資源等活用型
　　交流促進施設　大盛館
呼　称　不明
収蔵者　協和町教育委員会
L：126.0（107.4）（88.5）
H：83.9（31.7）
W：69.5（48.4）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は矢羽状に切り欠き）．基部は板材組、箱状で蓋付き．座板やや高く，腰掛ける姿勢．座板固定．分解したロクロ支柱等を基台箱内に収納．用材は広葉樹と杉．ハコバタと呼ぶことが可．

付図－7



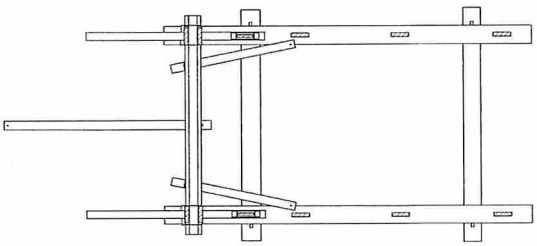


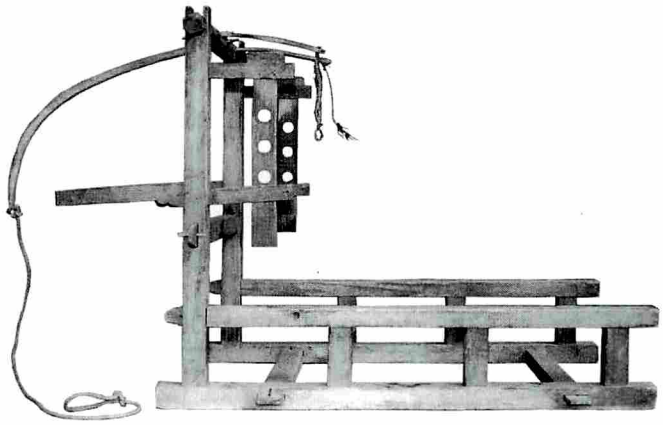


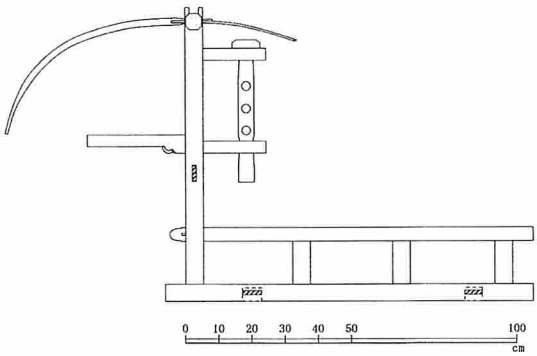


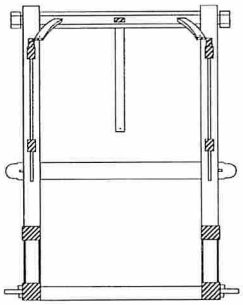
所在地　仙北郡南外村字松木田
　　なんがいむら民俗資料交流館
呼　称　不明（機織り機）
収蔵者　南外村教育委員会
L：136.3（110.7）（91.5）
H：90.0（38.5）
W：69.0（57.4）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は矢羽状に切り欠き）．基部は板材組，底板無し．座板やや高く，腰掛ける姿勢．座板は釘付け，基台は分解不可．大きく前後に分解できる．用材は杉．同村荒又から収集．

付図－8



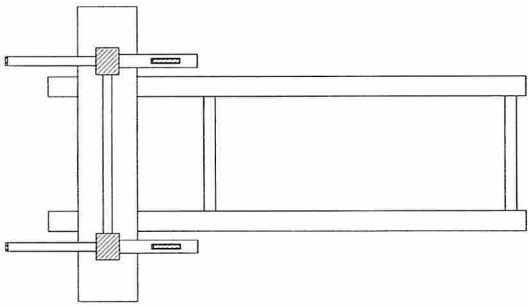


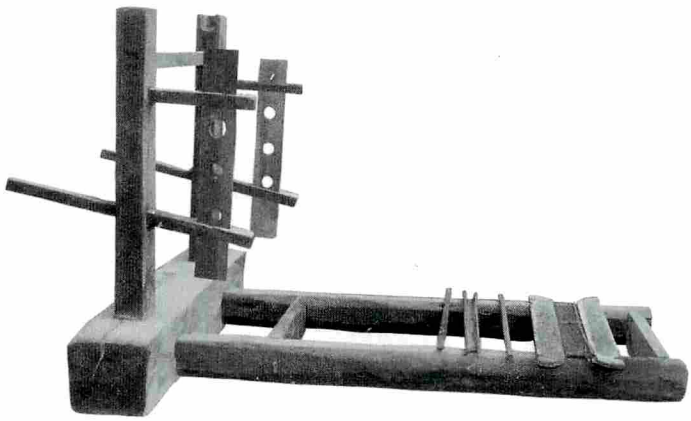




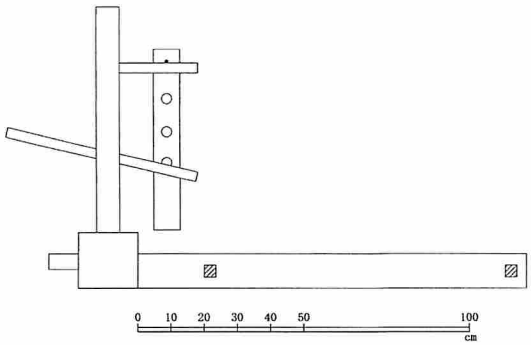
所在地　大曲市花館
　　大曲市民俗資料館
呼　称　不明（機織り機）
収蔵者　大曲市教育委員会
L：134.6（104.9）（86.5）
H：88.6（36.3）
W：59.8（48.8）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（形態は不明）．基部は角材格子組．座板位置やや高く，腰掛ける姿勢．大きく左右に分解できる．ロクロ支柱も取り外し可．用材は杉，一部広葉樹．同市間倉から収集．

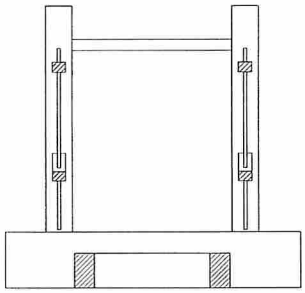
付図－9





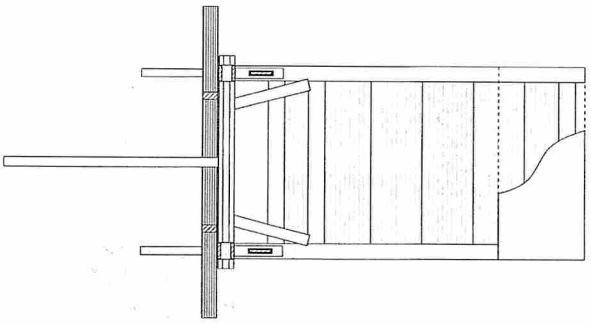
※一部欠損部分を画面上で修正

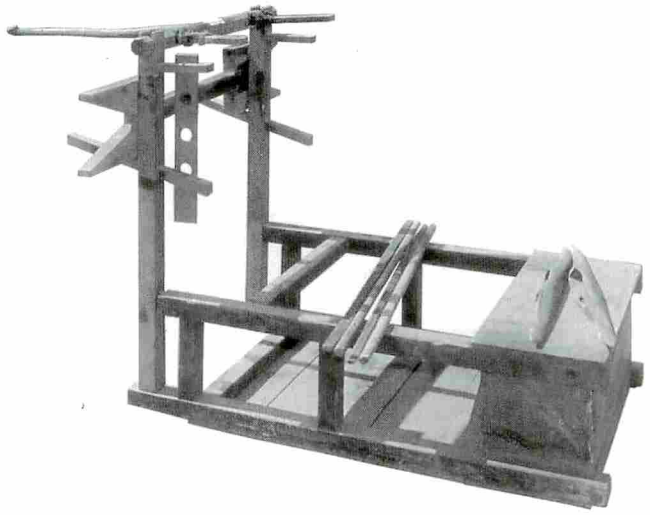


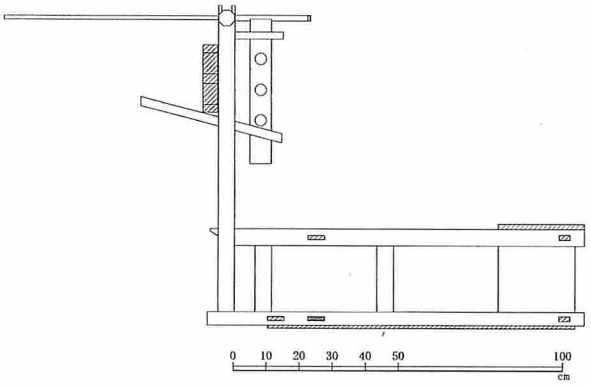


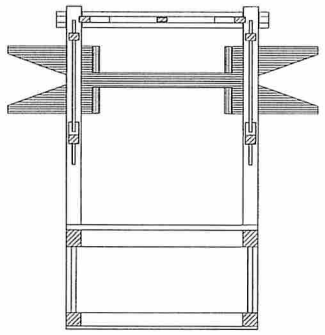
所在地　大曲市花館
　　大曲市民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　大曲市教育委員会
L：157.4（130.0）（108.7）
H：108.7（39.1）
W：88.9（48.0）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（形態は不明）．基部は角材組．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく前後に分解できる．県下の地機では機長が長い方．杉材．荒い製材を用いた素朴な作り．同市間倉から収集．

付図－10



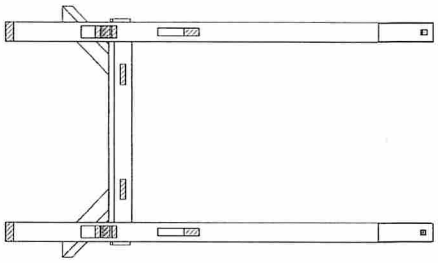


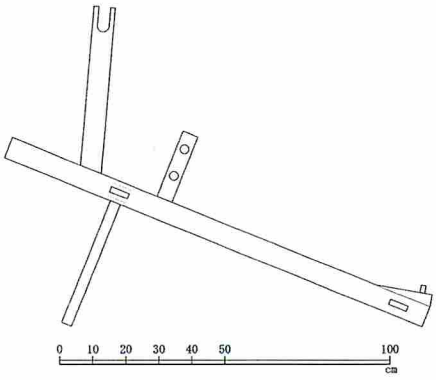


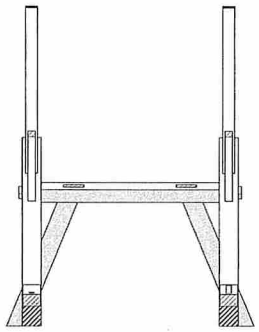


所在地　大曲市花館
　　大曲市民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　大曲市教育委員会
L：134.9（111.4）（98.5）
H：97.5（42.3）
W：58.0（49.0）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（両側は矢羽状に切り欠き）．基部は角材格子組、底板付き．座板釘付けで，やや高く，腰掛ける姿勢．ロクロ支柱をはずし，他の部品とともに基台内に収納．用材は杉．

付図－11



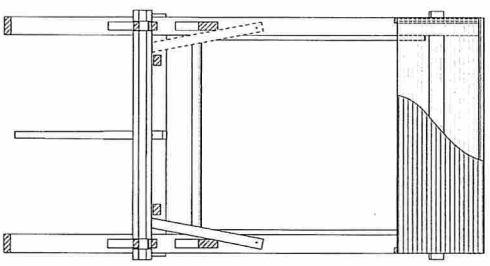


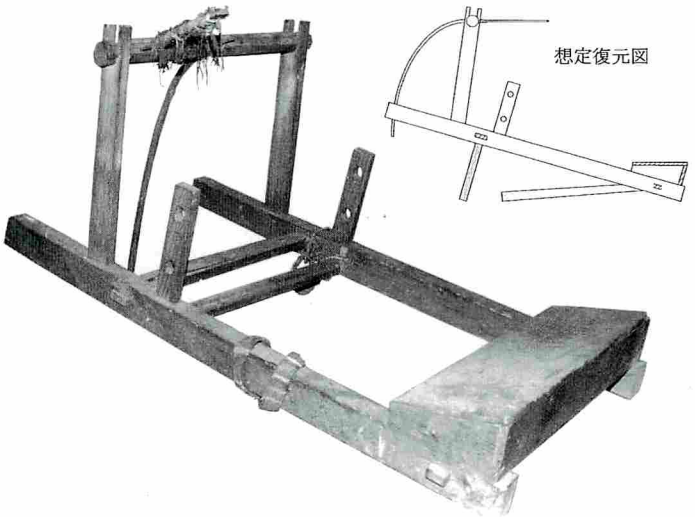


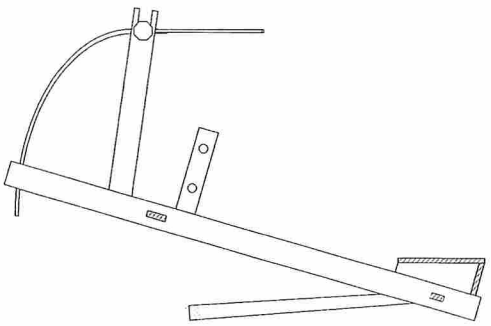
所在地　由利郡大内町岩谷
　　大内町歴史民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　大内町教育委員会
L：136.5（114.4）（86.7）
H：97.2（35.3）
W：75.8（56.8）　傾斜：約22°
　傾斜機．三角型の中筒使用と推定．経巻はカンザシチキリと推定（形態不明）．押さえ棒は固定取り付け．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく左右に分解できる．用材は広葉樹．収集地不詳．県内地機としては傾斜機は特異．

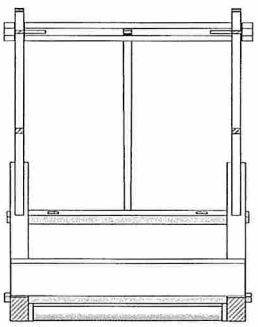
L：機台全長（ロクロ支柱背から後端まで）※（押さえ棒中心から後端まで）

付図－12









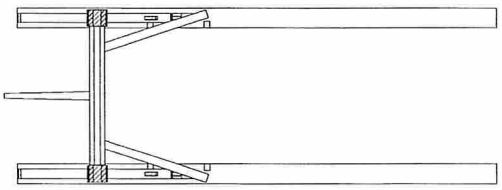
所在地　由利郡大内町岩谷
　　大内町歴史民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　大内町教育委員会
L：147.7（116.9）（92.7）
H：94.1（26.9）
W：71.2（63.1）　推定傾斜：16°
　傾斜機．三角型の中筒使用と推定．経巻はカンザシチキリと推定（形態不明）．押さえ棒は固定取り付け．座板低く，足を投げ出す姿勢．左右分解型だが、座板固定のため分解不可．用材は杉．収集地不詳．座板水平位置で傾斜を推定．

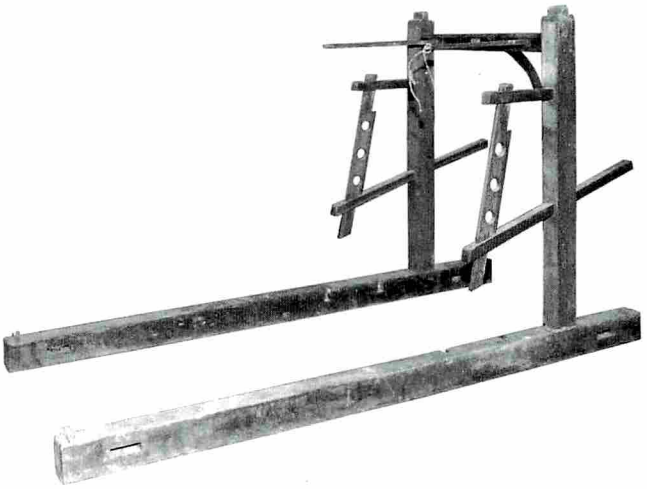
0　10　20　30　40　50　100 cm

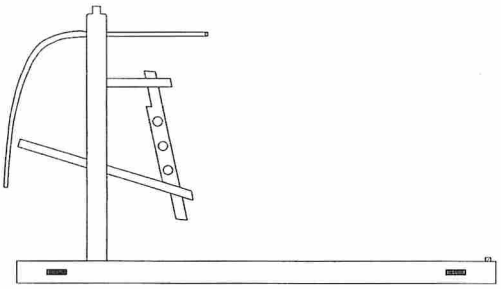
座板が水平になるように傾きを再現、波線で足を想定補足

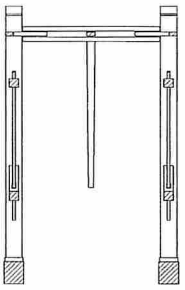
L：機台全長（ロクロ支柱背から後端まで）※（押さえ棒中心から後端まで）

付図－13





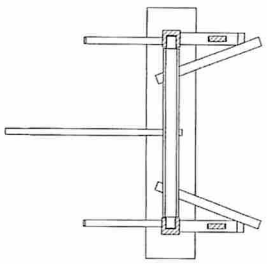


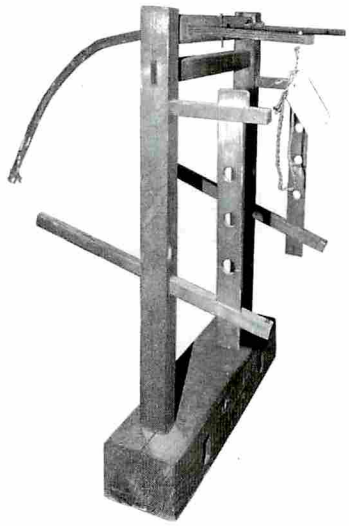


所在地　由利郡大内町岩谷
　　大内町歴史民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　大内町教育委員会
L：144.7（123.5）（100.5）
H：84.1（35.6）
W：53.0（42.0）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（形態不詳）．基部は角材組．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく左右に分解できる．用材は杉一部広葉樹．大きく傾斜した中筒が特異．高尾小学校で教材として収集．

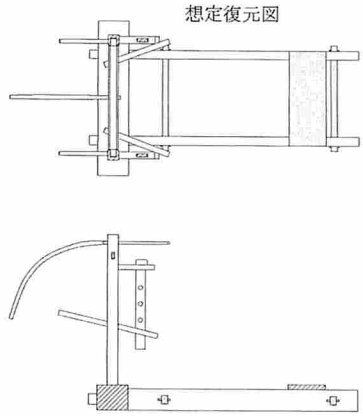
0　10　20　30　40　50　100 cm

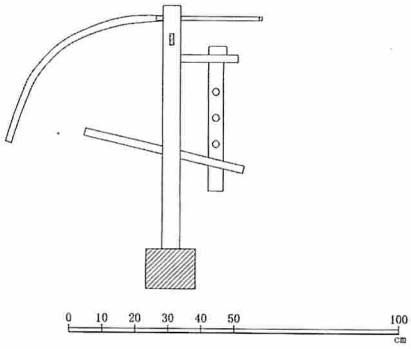
付図－14

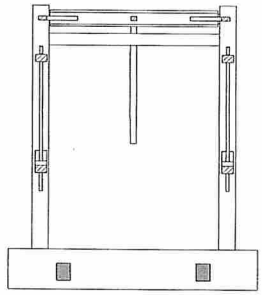




想定復元図

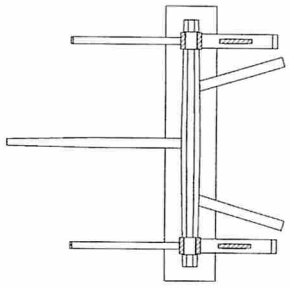




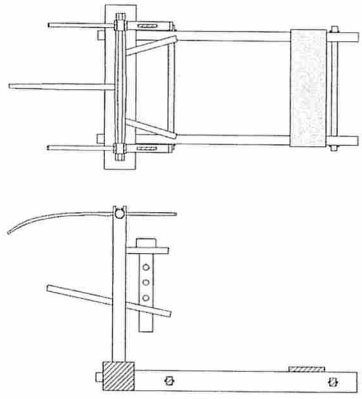


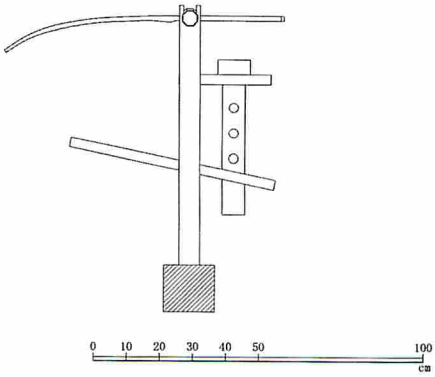
所在地　由利郡大内町岩谷
　　大内町歴史民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　大内町教育委員会
L：推定145.4（121.6）（105.7）
H：85.5（推定41.0）
W：75.5（51.6）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（形態は不明）基部の欠損部は角材組と推定．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく前後に分解できるタイプ．杉材．上川内小学校で教材として収集．

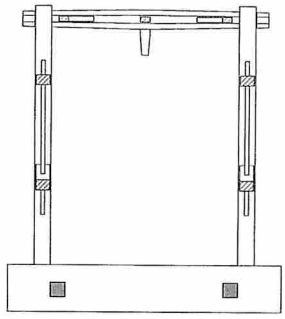
付図－15



想定復元図

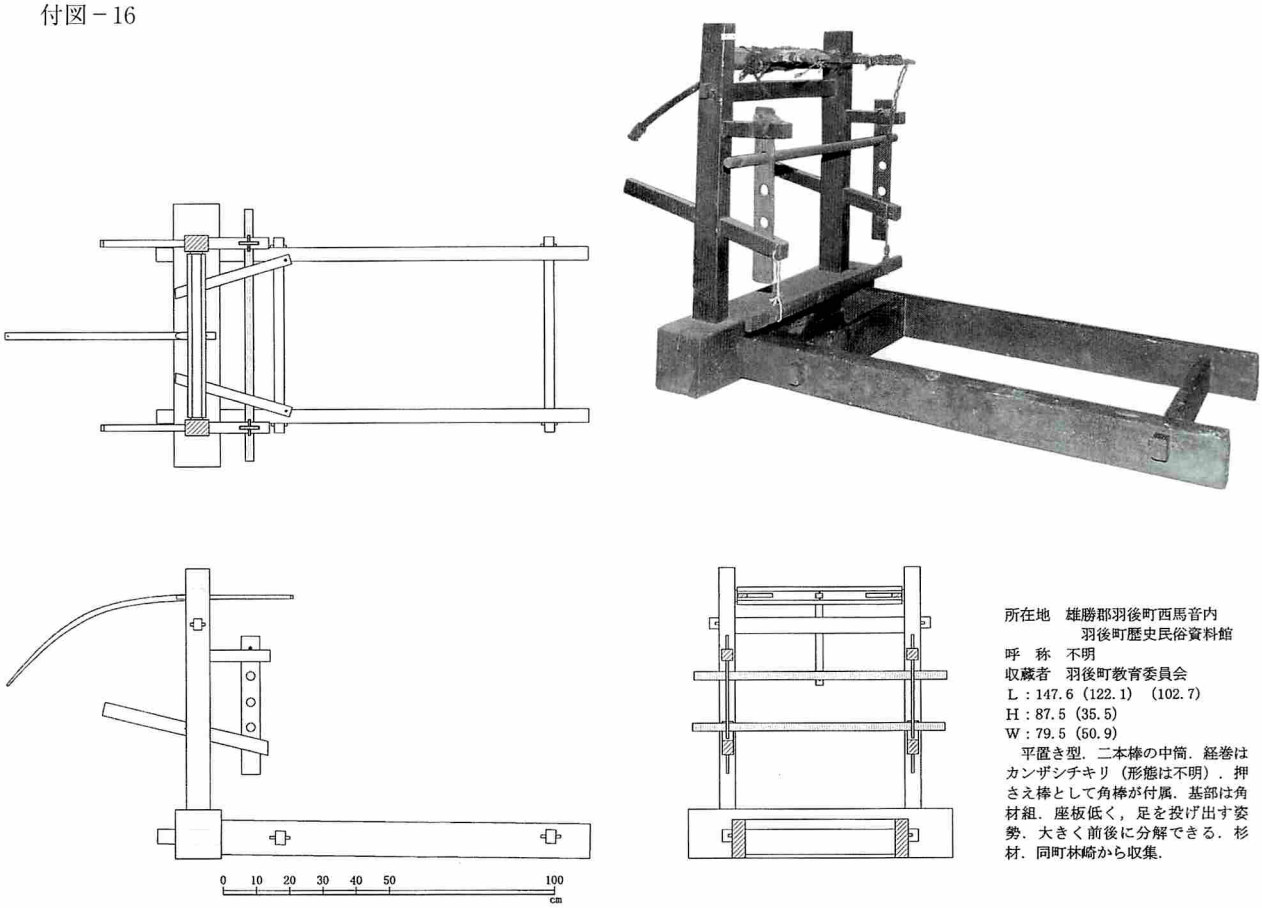






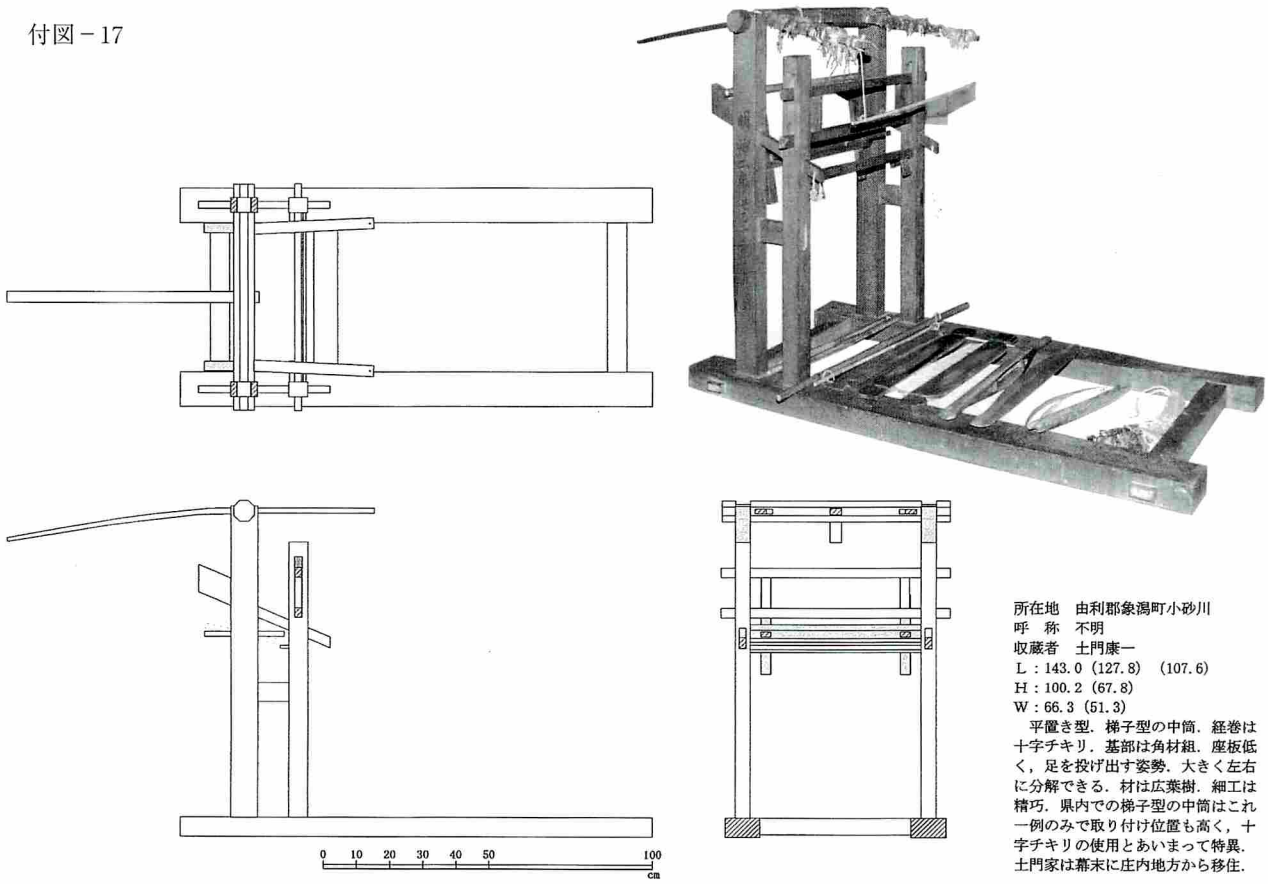
所在地　由利郡大内町岩谷
　　大内町歴史民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　大内町教育委員会
L：推定155.6（122.4）（105.7）
H：93.0（推定43.1）
W：83.0（56.8）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（形態は不明）基部の欠損部は角材組と推定．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく前後に分解できるタイプ．ロクロの形に膨らみがある．杉材．同町高尾で収集．

付図－16



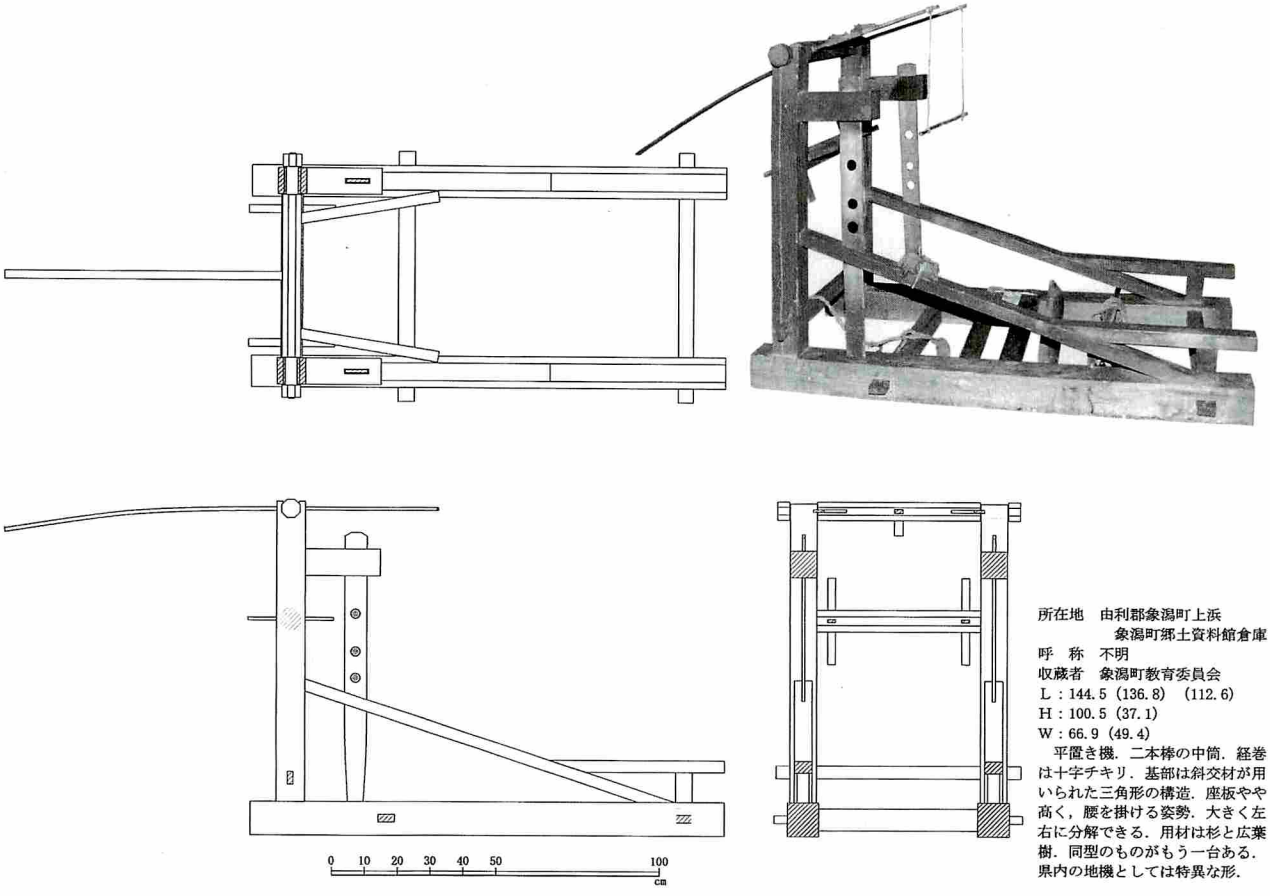
所在地　雄勝郡羽後町西馬音内
　　羽後町歴史民俗資料館
呼　称　不明
収蔵者　羽後町教育委員会
L：147.6（122.1）（102.7）
H：87.5（35.5）
W：79.5（50.9）
　平置き型．二本棒の中筒．経巻はカンザシチキリ（形態は不明）．押さえ棒として角棒が付属．基部は角材組．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく前後に分解できる．杉材．同町林崎から収集．

付図－17



所在地　由利郡象潟町小砂川
呼　称　不明
収蔵者　土門康一
L：143.0（127.8）（107.6）
H：100.2（67.8）
W：66.3（51.3）
　平置き型．梯子型の中筒．経巻は十字チキリ．基部は角材組．座板低く，足を投げ出す姿勢．大きく左右に分解できる．材は広葉樹．細工は精巧．県内での梯子型の中筒はこれ一例のみで取り付け位置も高く，十字チキリの使用とあいまって特異．土門家は幕末に庄内地方から移住．

付図－18

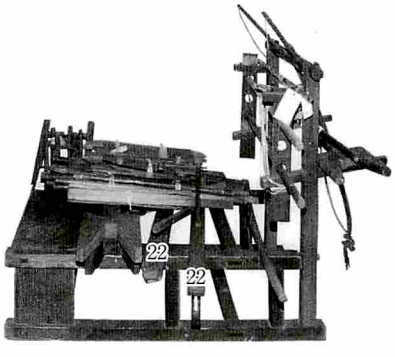


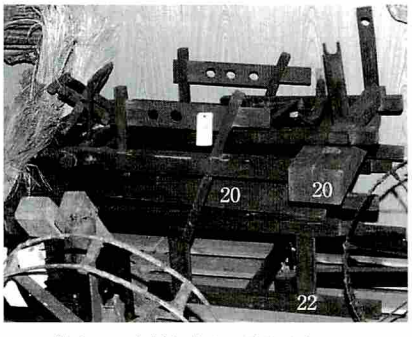
所在地　由利郡象潟町上浜
　　象潟町郷土資料館倉庫
呼　称　不明
収蔵者　象潟町教育委員会
L：144.5（136.8）（112.6）
H：100.5（37.1）
W：66.9（49.4）
　平置き機．二本棒の中筒．経巻は十字チキリ．基部は斜交材が用いられた三角形の構造．座板やや高く，腰を掛ける姿勢．大きく左右に分解できる．用材は杉と広葉樹．同型のものがもう一台ある．県内の地機としては特異な形．

付図－19（図化していない資料を収録した。番号は図３－１中の番号と対応）

19　小坂町　格子組基台，左右分割

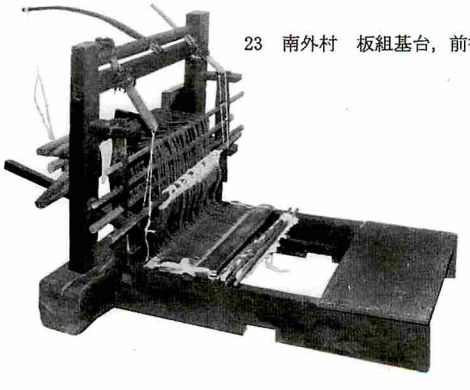
21　協和町　格子組基台，基台分解不可
ロクロ支柱他をはずして収納





20　協和町　角材組基台，前後分割

22　協和町　格子組基台，基台分解不可
ロクロ支柱他をはずして収納



23　南外村　板組基台，前後分割

24　象潟町　基台に斜交部材を用いる，
十字チキリ，左右分割